

著者：サンダース・バー  
訳者：杉本 卓

# 本が死ぬところ暴力が生まれる

## テレビシャワーの加害を衝く

が崩壊と消滅に瀕している。

今日の若者は読み書きに魅力をもたず接觸もしないために、先人の案内や恩恵なしに生きていかねばならない。そこに登場するのが「絶望とドロップアウト、十代の子ども」の自殺、ギャングの殺し合い、崩壊家庭、そして殺人に満ちた世界」であり「良心のためも後悔もなく、人が人を殺す世界」だ、と著者はいう。

これは銃が野放しのアメリカの姿だが、日本でも青少年の犯罪や諸行動が質的に変化してきて、電子メディアの影響やV・チューブ導入の是非も論議中である。この著者の論点はより根源的で、とくに乳幼児期の精神や心理（つまり脳）の発達成長が、読み書きとともに育まれるかを方説する。

西洋思想史に「自己」概念が認知されたのはそれほど古

いことではないが、現在それ係や構造を愈入りに認識する

本が死ぬところ  
暴力が生まれる  
著者：サンダース・バー  
訳者：杉本 卓

ハーパー・サンダース  
日本語版

以上、文章の詳い内容や題名につきあつことを学ぶ。そこから反省行為もまた生まれてくる——つまり、識字は内的世界を充実するためのきめめて根源的な体系なのである。

ゆえに3~5歳児へのテレビ

シャワーは、まさにイメージづくりの学習が必要なその時期に、模造品で脳を根底から破壊する。その被害ぶりは「こころと環境との構造的結合はほとんど排除され」「隠喩的イメージは発達しない」「脳の高次の皮質領域は機能しない」「記号概念体系の発達もない」等々で、しかも回復は一生無理のようだ。

識字への道は口承文化なしには進まず、入口は乳児の最初の呼吸や母乳の吸引からとする著者は、アメリカの母親を仕事の場に引き出すために19世紀後半~20世紀に仕組まれた、人工ミルク普及や幼稚園教育の役割も批判する。マスコミや教育関係者に読まれるべき書だが、テレビ界で働く者は、乳幼児の脳への影響を知るための必読書だ。

（新曜社 2850円）

奥田史郎（出版支部）